

## 1. チシマザクラ *Cerasus nipponica* (Mastum.) Ohle ex H. Ohba var. *kuriensis* (Miyabe) H. Ohba

昨年度の植物園だよりシリーズ②④では、「日本の植物学の父」として人々の関心が高かった、牧野富太郎博士ゆかりの植物について紹介しました。一方で、同時期に北海道でも植物学で活躍した研究者がいました。本園の初代園長、宮部金吾博士その人です。そこで植物園だより2024年度のシリーズ②⑤では、園内で見られる植物のなかでも宮部博士ゆかりの植物について紹介していきます。

シリーズ初回は、春の訪れとともにうすもも色の花を木の枝いっぱい咲かせるチシマザクラをとりあげます。チシマザクラは宮部博士により、1890年に当時スモモ属に置かれていた *Prunus ceraseidos* Siebold の変種 var. *kuriensis* Miyabe としてアメリカの学術雑誌に記載・発表されました。現在では、サクラ属 *Cerasus* として分けられたタカネザクラの変種として扱われています。表題の学名では、母種のタカネザクラの学名の後に変種を示す *varietas* の省略形 var. 以下が続いて、元になった学名を記載した宮部博士の名前が括弧でくくられています。

チシマザクラは北海道・南千島・本州中部以北にみられ、高さ1.5～6mの低木で、花は葉の展開とともに咲き、花の柄と萼に多くの毛が生えているのが特徴です。花の後には7, 8mmほどの小さな実がなり、赤から黒く熟します。北海道東部の厚岸町にある国泰寺のチシマザクラは、桜前線の最後の方に咲くので有名ですね。

チシマザクラは本園では高山植物園で見ることができ、宮部博士については宮部金吾記念館の展示で詳しく説明しています。



## 2. ヤマシャクヤク *Paeonia japonica* (Makino) Miyabe et Takeda

今シーズンの植物園だよりは、本園の初代園長、宮部金吾博士ゆかりの植物を紹介しています。シリーズ 2 回目は、初夏の林床に白い花をひっそりと咲かせるヤマシャクヤクを取り上げます。

本種ははじめ牧野富太郎によってベニバナヤマシャクヤクの変種として記載されましたが、1910年に宮部博士と植物学者で登山家の武田久吉が、独立した種としてイギリスの学術誌に発表しました。植物の学名は属名、種小名を斜字体で表記し、命名者がその後ろに表記されます。表題の学名では、もともになった学名を記載した Makino が括弧でくくられ、その後ろにその学名をもとにして組み替えを行った宮部博士と武田の名前があります。北海道、本州、四国、九州に見られる日本の固有種です。

50cm ほどの高さになり、丸みを帯びた葉がつきます。5~6 月、茎の先端に大きな白色の花がひとつ咲き、花びらはふつう 6 枚あります。よく似たベニバナヤマシャクヤクもときに白い花をつけますが、こちらは花びらがふつう 5 枚で、雌しべの先が強く曲がることで区別できます。



両種とも花が美しいので園芸用に採取され、また自生地が開発によって失われているので、環境省および北海道の絶滅危惧種に指定されています。このような絶滅危惧種の遺伝資源の保存も、植物園の大事な使命となっています。

ヤマシャクヤクは、本園では西側にある北方民族植物標本園にあります。その北側にあるエンレイソウ園付近では本種に加えベニバナヤマシャクヤクも見ることができます。



## 3. アマニュウ *Angelica edulis* Miyabe ex Y. Yabe

今シーズンの植物園だよりは、本園の初代園長、宮部金吾博士ゆかりの植物を紹介しています。シリーズ3回目は、初夏の草原で草丈高く白い花が目立つアマニュウを取り上げます。

本種は1893年にイギリス人宣教師ジョン・バチェラー博士と宮部博士によって、アイヌ民族が食用とした植物 *Angelica edulis* Miyabe として日本アジア協会誌に英文で紹介されました。その後1902年に植物学者の矢部吉禎<sup>よしただ</sup>によって正式に記載がなされています。植物の学名は属名、種小名を斜字体で表記し、命名者がその後ろに表記されます。表題の学名では、当初の命名者である宮部博士の名前が、ex の後に続く矢部の名前にフォローされる形で表されています。日本の固有種で北海道、本州中部以北のほか、<sup>ほうきだいせん</sup>伯耆大山と四国の<sup>いしづち</sup>石鎚山にも分布します。

1~2m の高さにも伸びて、丸みをおびた葉が つきます。7月、茎が枝分かれして先端に白い小さな花が集まって傘を広げたように咲きます。この仲間はどれも強いにおいがあり、似たような花を咲かせますが、葉や葉の柄、花びら、実の形、花の基部に線状の器官があるかなどで区別することができます。種によって咲いている期間が違っていることも、見分けるポイントになります。

アマニュウは本園では西側にある草本分科園で見ることができ、バチェラー博士の邸宅は本園の文化財建築物群の中にバチェラー記念館として移築・保存されています。



## 4. エゾノシロバナシモツケ *Spiraea miyabei* Koidz.

今シーズンの植物園だよりは、本園の初代園長、宮部金吾博士ゆかりの植物を紹介しています。シリーズ4回目は、初夏に白く小さい花をたくさん咲かせるエゾノシロバナシモツケを取り上げます。

本種は1909年に植物学者の小泉源一によって、*Botanical Magazine (Tokyo)* 『植物学雑誌』に記載・発表されました。植物の学名は属名、種小名を斜字体で表記し、命名者がその後ろに表記されます。表題の学名では、種小名に当時活躍していた宮部博士の名前が献名として表されています。北海道、本州北部のほか、朝鮮半島及び中国にも分布しています。

高さ1~2mの落葉低木で、縁にぎざぎざのある楕円形の葉がつきます。5~6月、枝の先に白い小さな花がたくさん集まって咲きます。花びらは5枚で、長い雄しべが目立ちます。花のあとには金平糖のような形をした小さな実がたくさんなります。この仲間はどれも似たような花、実をつけますが、花の柄の分かれ方や葉の形で区別されています。種によって咲いている期間が違っていることも、見分けるポイントになります。

エゾノシロバナシモツケは本園では高山植物園と灌木園で見ることができます。



## 5. ピレオギク *Chrysanthemum weyrichii* (Maxim.) Miyabe et T. Miyake

今シーズンの植物園だよりは、本園の初代園長、宮部金吾博士ゆかりの植物を紹介しています。シリーズ 5 回目は、秋の海岸で白く美しい花を咲かせるピレオギクを取り上げます。

本種は 1859 年にロシアの植物学者マキシモヴィッチによってフランスギク属の新種として記載されましたが、1915 年に宮部博士とその弟子で植物学者・植物病理学者の三宅勉によって発表された *Flora of Saghalin*『樺太植物誌』においてキク属に移されました。植物の学名は属名、種小名を斜字体で表記し、命名者がその後ろに表記されます。表題の学名では、もともになった学名を記載した Maxim. が括弧<sup>かっこ</sup>でくくられ、その後ろにその学名をもとにして組み替えを行った宮部博士と三宅の名前があります。

北海道、樺太の日本海側の海岸の岩場に生育する高さ 20cm ほどの多年草で、光沢があり厚みのある深く裂けた葉が広がります。8~9 月、茎の先に白いマーガレットのような花が咲きます。本州以南に生育するイワギクと同種とされたこともありましたが、葉の形状が異なり分布も異なることから、現在では別の種として扱われています。

ピレオギクは本園では草本分科園と高山植物園で見ることができます。



## 6. クロビイタヤ *Acer miyabei* Maxim.

今シーズンの植物園だよりは、本園の初代園長、宮部金吾博士ゆかりの植物を紹介しています。シリーズ6回目は、北海道に自生する絶滅危惧種のクロビイタヤを取り上げます。

本種は1884年に当時札幌農学校助教であった宮部金吾により日高地方新冠町で採取された標本に基づいて、ロシアの植物学者マキシモヴィッチによって1888年に新種として記載されました。植物の学名は属名、種小名を斜字体で表記し、命名者がその後ろに表記されます。表題の学名では、種小名に発見者である宮部の名前があります。

北海道の石狩、日高地方および岩手県、秋田県、長野県に点々と分布する落葉高木で、手のひらのように裂けた葉には波うつようなギザギザがあります。5月に緑色の花が咲き、花の後には羽のついた実がたくさんなり（写真中央部の黄緑色の部分）、11月ごろには美しく黄葉した葉がみられます。自生地が開発によって失われ、環境省の絶滅危惧種に指定されています。

クロビイタヤは本園では博物館前の南ローンや樹木園の南部などで見ることができます。

